日本の聖と賤

中世篇

野間 宏／沖浦和光

人文書院

日本の聖と賤

中世篇

野間宏／沖浦和光

人文書院

野間　宏（のま　ひろし）

1915年神戸市生。京都大学文学部卒。作家。『暗い絵』『真空地帯』『歓異抄』『青年の環』『親鸞』『狭山裁判』,『アジアの聖と賤』『差別・その根源を問う』(以上二点共著),『世界』に「狭山裁判」を連載中。

沖浦和光（おきうらかずてる）

1927年大阪生。東京大学文学部卒。桃山学院大学教授。近代文化論，アジア思想史。『近代の崩壊と人類史の未来』『日本民衆文化の原郷』『近代日本の思想と社会運動』,『アジアの聖と賤』(共著) 等。

日本の聖と賤
――中世篇

一九八五年七月二十五日初版第一刷印刷
一九八五年十月　十　日初版第二刷発行

著　者　野間　宏
　　沖浦和光
発行者　渡辺睦久
発行所　人文書院
京都市下京区仏光寺通高倉西入
電話〇七五・三五一・三三九一
振替京都〇―一一〇三

印刷　株式会社太洋社
製本　坂井製本所

© 1985. Hiroshi NOMA
Kazuteru OKIURA
Printed in JAPAN.

ISBN4-409-24019-6　C0036

日本の聖と賤・中世篇＝目次

第一章 日本文化の深層に潜む〈聖〉と〈賤〉 …… 7

《天皇制》と《賤民制》 8
〈制度化された文化〉からハミ出したもの 11
身分差別の原構造 15
「士・農・工・商・賤」という図式は間違っている 21
天皇制と武家権力 25
中世散所を起源とする土佐の部落 31
旧南王子村の文化的伝承 39
古い由緒をもつ熊野街道の部落 46

「かわた」から「穢多」へ　52
被差別民衆の共同体意識　59
地下伏流としての賤民文化　64
シャーマニズムと神事芸能　69
国家宗教に抑圧された呪術者　77

第二章　国家宗教に反逆した聖の群れ……89

日本仏教史における聖の系譜（1）　90
日本仏教史における聖の系譜（2）　97
民衆史における毛坊主　105
空也念仏聖の末裔　109
〈王法〉と〈仏法〉　115
厭離穢土・欣求浄土　123
鎌倉新仏教の革命性　131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

浄土思想と法然　135
〈自利・他利〉の思想と親鸞　139
蓮如と〈王法為本〉　148
一向一揆の社会的基盤　154
一向一揆と賤民層　161
中世賤民層の解体と再編　165

第三章
伝統的祝福芸と被差別民衆……171
古代の遊行神人　172
『新猿楽記』の世界　177
遊芸者は非人だった　184
清目、庭師、田楽、猿まわし　193
散楽から猿楽へ　202
古代楽戸の血をひく観阿弥・世阿弥　207

大和猿楽の故郷を歩く　213
歌舞音楽劇としての猿楽能　222
猿楽能の名曲はすべて賤民時代の所産　228
夢幻能の象徴するもの　232
「三卑賤」――『鵜飼』『阿漕』『善知鳥』　237
堕地獄の怨霊の叫び　243
説教から説経節へ　247
説教の演劇性と音楽性　252
賤民芸能としての説経節　257
説経節は日本民衆文学の原形質　261
あとがき　271

日本の聖と賤 ═ 中世篇

第一章

日本文化の深層に潜(ひそ)む〈聖〉と〈賤〉

鉦叩きと胸叩き（『七十一番職人歌合』）

《天皇制》と《賤民制》

野間　一九六〇年代後半から七〇年代に入って、各地方における被差別部落史の研究がめざましく進んできました。大和、山城、和泉、播磨などの畿内をはじめとして、筑前や豊前の北九州、さらに但馬、因幡などの山陰地方、それから阿波や土佐などの各地で、部落問題についてのこれまでの考え方を大きく変えるような史料がいくつか出てきています。

そこで出されている諸問題を体系的に考察すると、部落の起源だけではなくて、日本文化史の全体を見直すための新しい手掛りになると考えられます。今日はそういうところから論じてみて、日本の文化の深層構造に潜んでいる《貴》と《賤》の、あるいは《浄》と《穢》の対極関係といったところまで踏みこんで論じてみたいのですが……。とくに沖浦さんは、最近、各地方の部落を訪れて、いろいろ見聞されたようなので、そのあたりから問題をときほぐしていただきたい。

沖浦　まず最初に、長いあいだ抑圧され賤視されてきた被差別民衆が、身分制の歴史の中でどのように位置づけられ、生産・技術と文化・芸能の領域でどのような役割を担ってきたのかということをみておきたいと思います。最近は部落史研究も非常に進みまして、日本の文化・芸能史関係でも、広い意味では日本の賤民制、狭義では部落問題が視野に入っていないかぎり、その根のところ、つまり、もっとも深奥部にあるものを掘り起こせないという問題意識がはっきり出さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れてきています。

野間　まさに画期的なことで、戦前ではとうてい考えられない状況ですネ。

沖浦　ところで、これまでの官許の教育体系では、日本史、あるいは日本文化史は、天皇・貴種、つまり朝廷を中心とした支配階級や、それにかわって実権を握った武家権力などの、いわゆる支配体制の側の活動を中心として叙述されてきました。そして、日本の文化史の基層といいますか、実際の活動の深部を担ってきた多くの被差別民衆の仕事やその生きざまは、ほとんど黙殺されるか、故意に抹殺されてきたわけです。

野間　バラバラと点在的に述べられることはあっても、体系的に日本における賤民史の伝統なり文化なりを叙述することはまったくなかった……。

沖浦　そうですネ。たとえば昭和前期に育った私などの世代は、学校教育では部落問題を一回も教えられた記憶がない。日本の中世文化を代表する世阿弥をやっても、彼が賤視されてきた散楽戸の系譜をひく出自であることは、全然触れられなかった。歌舞伎や人形浄瑠璃について教えられた時でも、彼らにまとわりついている河原者意識とはいったい何だったのか——そういうところはまったく突っ込まなかった。

野間　日本の賤民の問題、それに部落問題は、意識的に避けて通った。学校教育では、それらの領域に立ち入ることはタブーになっていたんですネ。

沖浦　賤民の歴史そのものを、歴史のなかの隠微で陰湿な闇の部分として抹殺してきたわけです。教師たちも、この問題については触れることを避けた。

これは保守派についていえるだけではなく、進歩派でもそうでした。戦前の左翼にしても、僅かの例外を除いては、賤民問題に真正面から光をあてるという視座はあまりもっていませんでした。どちらかといえば、歴史の陰湿な負の遺産としてしかとらえていなかった。同情的立場から支援することはあっても、被差別民衆それ自体の立場に立ってものを考えるということはなかった。西欧の近代市民社会を一面的に美化し理想化して社会変革のモデルとする、いわゆる西欧派近代主義の思想で、日本のマルクス主義派も色濃く裏打ちされていましたからネ。

野間　大正デモクラシー運動の高揚と米騒動の全国的波及をきっかけとして、部落問題についての追究がなされただけだった。それに、全国水平社が結成されても、セクト的なイデオロギー対立をそのまま持ち込んで分裂状態に追い込んでしまった。

天皇制にしても、その対極にある部落問題にしても、それらを〝封建遺制〟という理解のもとで、どちらも同じ負の遺産として一刀両断のもとに切り捨ててきた……。

沖浦　そうです。公式的に裁断して、鋭く突っ込むことがなかった。ズバリいえば、日本の歴史を貫徹する《浄》と《穢》、あるいは《貴》と《賤》という、文化表象そのものに関する基本的な対立構造についての、完全な認識不足です。守旧的な唯物史観派では、なにもかも土台還元論といいますか、経済的な階級関係に押しこんで、そこから判断しようとする姿勢が強かった。

しかも明治維新前の伝統文化は、なにもかも西洋よりはずっと遅れているアジア的遺制としてとらえられたから、民衆史の産み出した貴重な民俗的遺産や伝承文化も、すべて反近代的で非合理的な古い文化として否定されたんです。

野間　一九七〇年代に入ってからは、柳田国男や折口信夫の提出した民俗学的な視座がにわかに注目されるようになった。そして、日本民衆史の見直しという問題意識がかなり前面に出てきたが、守旧派マルクス主義であるいわゆる「講座派」がリードしてきたそれまではひどいものだったといえますネ。

沖浦　だから、民衆が長い間持続してきた社会意識、文化伝承、宗教的観念、土俗信仰などを全体的かつ精密に考察する視角と方法に欠けていた。いってみれば、大鉈で、階級的視点から裁断するという方法は身についていたが、身分的視点がきわめて弱く、民衆的視座から日本史を底辺から洗い直すという問題関心がほとんどなかったといえます。

野間　たしかに大鉈だった。しかも錆びついた鉈で強引に叩き切るんだから始末が悪い(笑)。たとえば具体的にいえば、天皇の存在と被差別部落の存在を、日本史を貫徹している身分制の対極として把握する視点なんかも、講座派の天皇制論ではほとんど欠けていましたネ。

〈制度化された文化〉からハミ出したもの

沖浦　もう少し射程をのばしていえば、《天皇制》と《賤民制》の対立関係を、日本国家の歴史的構造のなかでどのようにとらえるかという問題意識です。これはなにも、天皇制国家論や身分制を中心とした社会構成論の問題にとどまるものではなく、日本文化史・宗教史の根底に潜む〈豊

饒な闇〉の領域に関連している。これは、戦前からのマルクス派唯物史観には、ほぼ完全に抜け落ちていた視座です。

水平社創立期の若き理論的リーダーであった高橋貞樹が一九二四年に著した『特殊部落一千年史』（更生閣）のように、萌芽的にその問題を指摘した先覚者も皆無ではなかったのですが、ごく少数でした。私なども含めて、いずれも西欧の近代市民社会の理想化に発想の拠点をおくモダニズム的思考に傾いていましたから、《貴》と《賤》の対立構造から日本国家の原構造に迫るという視角を見失っていたといえます。

野間　多くの日本人は、表はモダニズムでありながら、自己の内部には、『日本霊異記』に出てくるような奇怪なもの、異形の姿をもったものが依然として心のうちに動いていることがあるわけです。幼少年期にすごしたわが家には、そのような「死人」や「化物」の影がたえず動きつづけていたといえる。私もこれまで書いた小説の中で、そういった問題をいろいろ追求して描いてきたんだが……。批評家は、そのことにあまり気がつかなかったようです……。

沖浦　自分たちの記憶のいちばん底に残っている、そういった非日常的で混沌とした土俗的なもの、いい直せば、〈制度化された文化〉からはみ出したドロドロしたもの――民衆の生きざまには多少ともこうしたものが絡み付いていたわけで、それをこれまでの近代主義的合理思想では、すべて無意味で蒙昧なものとして切り捨ててきたわけです。

野間　ところが、そういったものが意味するものは決して単純でないことが、みんなしだいにわかってきた。

沖浦　日本の文化史や宗教史の深層にかかわるものであり、その問題を避けて通っては日本の民衆文化史を構成できないことが……。

野間　柳田国男や折口信夫の民俗学が、一九六〇年代後半からしきりに読まれるようになってきたのは、そういう問題意識と深くかかわっていますネ。

沖浦　これまでは歴史学が中心になって、《天皇制》と《賤民制》の問題にアプローチしてきました。ところが、教条主義的唯物史観の影響を強く受けている歴史学の方法論では、どうしても経済的土台還元論というか、階級論ですべての事象を整序する視点だけが表に出てきて、歴史の深層に潜むものがつかみきれていない。

いうなれば〈制度化されたもの〉だけが視野に入ってきて、既成の秩序からハミ出した〈制度化されないもの〉は、読解不能の曖昧なものとして切り捨てられてきた。しかも、彼らにとって読解不能の領域は、無意味なもの、価値なきものとしてそのまま放置されてしまった。権力によって負の象徴性を帯びたものとして烙印を押されたものは、その意味するものを問われることもなく、歴史の闇の中に埋められてきたのです。

野間　そういう問題領域をあらためて見直そうという気運が出てきたのは、やはりこれまでの歴史方法論に限界があるということが、しだいにはっきりしてきたからですネ。

沖浦　そうです。誤解を恐れずにいえば、そういった荒っぽい歴史図式の網の目からこぼれ落ちていた民衆の生きざまをたんねんに拾い集めてきたのが民俗学であったわけです。正統を自称した歴史学から見れば、二次的な傍流にすぎないとされてきた民俗学があちこちで読まれだし

た。

野間　もちろん、歴史を扱うのだから歴史的史料が基本的にものをいうのだが、たんに史料の表層だけの解釈に終結するのなら、歴史の深層にあるものは見えてこない。

沖浦　一つ一つの史料だけを分割して見れば、その事象はゆるぎない確定的な事実のように思える場合が多いわけです。だが、それを一定の歴史的文脈の中で位置づけ、他の多くの史料と綜合化しながら考えていくと、行間に見えるよりも、もっと多義的で深いものが読めてくる。既成の歴史学の物差(ものさし)だけなら、一見したところ曖昧で両義的な要素を多分に含んでいる、民衆のさまざまの社会意識や民俗慣習などをトータルに把握することはできません。

野間　民俗学のみならず、文化人類学や文化記号学などが、一九七〇年代に入って盛んに読まれているのは、やはりそこに基因しているのですネ。しかし、それらも、まだまだ取り逃がしているところが多いですよ。

沖浦　そう思います。神話学、考古学、象徴人類学、経済人類学、宗教民俗学などの本がよく読まれているのは、これまで人間の歴史に関してその一元(いちげん)的な支配圏を誇ってきた歴史学に対する、一種の知的反動です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com